

---

**B L A Z E   M A G E   ~ 龍焰の魔法使い ~**

秋月 ヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLAZE MAGE ～龍焰の魔法使い～

### 【Nコード】

N4975Q

### 【作者名】

秋月 ヒロ

### 【あらすじ】

とある世界の、片隅の島。

その島で、満月が昇る明るい夜に、少年と少女が出逢った。

全てを失くして、それを取り戻すため、守るために戦っている少年。

先の見えない暗闇の中、あきらめきれない希望にすぎる少女。  
つながる絆、過去と今。

運命の糸は交わりあい、世界に模様を描き出す。

これは少年少女の、剣と魔法と　それから、恋の物語。

第零話 One Thousand Years Ago (前書き)

どうもです。

これはプロローグなので変わってないですよ。

期待しないでくださいねー。

第零話 One Thousand Years Ago

風が、吹いていた。

とても、とても、穏やかに。

俺のことを、励ますように、あるいは、労うように。

後悔は、ない。

やりたいことは、やった。

やりきった。

俺の役目は、これで終わりだよな？

俺のやってきたことは、やり遂げたことは、

無駄にはならないよな。

なあ、麗奈<sup>れいな</sup>。

おまえは、大丈夫だよな。

だってお前は、自分の足で、自分の思う方向へ、歩けるもんな。いつだったか、いろんな人の笑顔が見たい、って俺言ったよな。

それは、おまえのも含まれてるんだぜ？

おまえは、俺のいない世界で、どんな道を歩むんだ？

どんな顔をしてるんだ？

どんな、景色を見るんだ？

できれば、笑顔に満ちた世界にいてほしい。

ああ、だめだ、やっぱお前と別れんのは悲しいや。

全然、満足してねえよ。

けどさ、もう終わりなら。

こんな気持ちになれることそのものが悲しくて、嬉しいや。

……おまえと会えてよかった。

俺は、流留<sup>ながる</sup>は、おまえのことを、愛してる。

今までありがとう。



第零話 One Thousand Years Ago (後書き)

これは、まああれです。第一話とは全く関係ないです。でも、話の内容的にもすごく重要な場面なので。

感想とかくださいって、これだけじゃ無理かもですね。

早めに一話を上げる予定ですので、よろしくお願いします。

## 第一話 始まり、出会いへのプロローグ

ここは、魔法の存在する世界。

その東の端の島国、天ヶ原<sup>あまがはら</sup>。

一応、王制の国だ。

ここは魔法発祥の地と呼ばれ、いたるところに魔法的な遺跡や研究所などが存在する。

そして、この国を中心に世界中に展開する魔法ギルドがある。

世界魔法協会。

世界中の魔法ギルドの中で最も古く、最も大きく、そして、最も変わったギルドである。

今、数多くの伝説を作ってきた彼らの、新しい伝説が幕を開けようとしていた…

ジリリリリイ

ン……

朝、というには少し遅いが、昼というには早すぎる時間。

『魔導屋 竜爪蘭<sup>りゅうすゐらん</sup>』という看板が掲げられている、大きくも、小さくもない家。

その家のリビングで、古い電話のベルが鳴っていた。

「はいはい、今出ますよっと。」

そう呟きながら足を向ける茶髪の少年。

彼は、竜爪真流<sup>りゅうすゐまはる</sup>。

年は、15歳、背は、同年代の平均より少し高めだろうか。

ちよっと幼げな印象がある顔だちをしている。

そして、その目は：薄めの翡翠色ひすいこいろの、隻眼だ。  
左の眼には、燃えるような赤の眼帯をしている。

ガチャリ、と受話器を手に取った瞬間、真流の顔がピキリ、と引きつった。

なぜなら、受話器を上げた真流の耳に飛び込んできたのは

「おっひよっひよっひよっひよっひよ」

というギルドマス：いや、クソジジイの笑い声だったからだ。

プチツ、ガチヨン！！

キレた。二重の意味で。

叩きつけるように電話を切った真流の耳に、再び電話のベルが響く。

……出たくなかった。

本気で出たくなかった。

しかし、ここで真流が電話に出なかった場合、電話越しにあのジイさんと話すよりもめんどくさい事態が発生しかねない。

そのため、仕方なく、本当に仕方なく、受話器を上げた。すると、

「おいこりゃ、真流。貴様はせっかくのワシからの電話をじゃな

と、ご立腹のジイさんが何やらお説教に入りそうな気配があったので、

「……切られてキレるんなら、まともにかけてくれよ。電話に出たらいきなりジジイの笑い声が聞こえてきましたー、とか普通に怪談レベルだぜ。つか、会員の立体映像通信を使え。」

と、とりあえず正論で出鼻をくじいておくことにする。

「む、いいよるわい。まあとりあえずじゃのう、お主らにいい知らせじゃ。」

「いい知らせえ？」



…真流の経験上、このジイさんがこんなことを言い出した場合いいことだった試しがない。

いやまあ、万に一つ、億に一つくらい、事実だったりするが。

それでも、宝くじで3億当たるのと同じかそれ以下の確率ではなからうか。

「そうじゃ。いいしらせじゃ。ぬふふふふふ。」

「…切っていいか？なんか俺の勘が、こいつあやべえ！！という信号をビンビンに発しているんだが。」

という真流の言葉をきれいに無視し、ジイさんは話を進める。

「なんとじゃな、お主らに休暇のプレゼントじゃ！！」

「…ハア？」

サラリーマンだったら泣いて喜びそうな気がしなくてもないセリフだが、この場合、真流のリアクションは正しい。

なぜなら、ここは『魔導屋』であるからだ。

魔導屋とは、力のない人や、弱い人が何かしら魔導師の力が必要な場合、相応の報酬と引き換えに自らの力を貸す、いわゆる『なんでも屋』である。

そのため、依頼があるときは仕事をし、それ以外の時は普通に休める職業だ。

おそらく、最も家計の浮き沈みが激しい自営業だろう。

…つまり、魔導屋には『休暇』と呼べるものは実質存在しない。

にもかかわらず、休暇じゃ！！というジイさんに真流は猛烈に嫌な予感が増していくのを感じていた。

「聞いて驚け！！なんと、お主らを『雷帝の住まう町』に招待じゃ！！」

「嬉しくねえ！！つか、誰が好き好んであんな気の滅入る町に行くかよ！！違う意味で驚いたわ！！」

と、この真流の絶叫に近い突っ込みを皮切りに

「とりあえず片道分の切符を進呈じゃー!!」

「住めつてか!! 帰りの分も出せよ!!」

「宿泊施設は自分で探せ!!」

「どっか紹介するくらいしろよ!!」

「そして、なんとお…ダララララララララ、ダン!!」

「なんでドラムロール入れた、今!？」

「最近多発している謎の魔法光の調査というクエスト付きじゃー!!」

「依頼クエストつて言ったよ今!! やっぱ仕事じゃねえかつ!!」

「うるさいのう。いちいち叫ぶな。」

「あんたが叫ばせてんだろ!？」

…と、無駄にうるさい会話が展開された。

そして、電話の内容は、

「とりあえず片道分の交通費はこつちで出すから、『雷帝の住まう町』で起きた怪現象の調査してこい。」

と、ということらしい。

バタバタバタバタ

バガアン!!!

…えと、前半分は、だれかが廊下を走ってくる音なのだが…

後半は、なんと扉を開けた音である。

…なんか、扉から出てはいけない音の気がするのだが。

しかも不思議なことに、扉はぶつ壊れたりしてはいない。

きちんと蝶番にくっ付いたままである。

「ちょっと真流!! アンタ何騒いでんのよ!!」

「今のお前の声よりましだあ!!」

そう、扉はどうでもいい。

今叫んだのは、扉が吹っ飛んでもおかしくなくらいの勢いで部屋に飛び込んできたスレンダーな少女だ。

彼女は、かざのかえで風野楓。

年は、16歳。

オレンジのショートヘアに付けた赤と青のヘアピンがトレードマークである。

瞳は、サファイア深い青紫で、美少女だ。

「あなたはさつきからギャーギャー…って電話？」

「ああそつだよ。しかも会長から。」

「おいこら、真流。ワシのことはギルドマスターと呼べと言っておるじやろつ。」

受話器の向こうから何か聞こえた気がしたが、スルーし、真流はさっきの電話の内容を必要最低限の部分だけ抜き出して伝える。

「なんか、依頼が回ってきたぞ。場所は、『雷帝の住まう町』。なんか、最近魔法性の発光が夜中に多発していて、俺たちにその調査をしてほしいんだとよ。」

「……それって決定事項？」  
リビングにあるソファに座りそう聞く楓は、心底嫌そうに顔をしかめていた。

「…たぶん。なんかジイさんが休暇じゃーとかわけのわからんことを叫んでたから。」

「じゃから聞こえておると」  
「それで、そこまでの交通費はどうするんだ？」

受話器の向こう側は放置しておくとして、隣りからの声にこたえるべく…って隣りい！？

「ああそれは…ってえ仁！おま、いつ入ってきたんだよ！そしてなんで俺たちは気づかなかったんだ！？」

いつの間にか真流の隣には、黒髪のツンツン頭の少年が立っ

た。

彼は氷ノ宮仁。ひのみやじん

18歳で、真流よりも背は高いが、若干平均よりも低い。

仁は、その茶色の瞳を真流に向け、

「なんで気づかなかったか？簡単だ。まず、僕が気配を消していたこと、そして、君は自宅だから気が緩んでいたから。だからさ。」  
と、さっきの自分の質問を放棄し、答えた。

「いや、待て。その前に、何でおれたちが視認できていなかったんだ？」

「ふっ…簡単だよ。氷のヴェールで光を屈折させて…」

「そんなことに魔法を使うな！！」

真流、本日何回目かわからない突っ込みが炸裂。

しかし、当の本人はケロリとした顔で真流を指差し、

「それ、そのままでもいいのか？」

と、正確には受話器を指差し言った。

「ハア、ハア、…なんで俺、電話を取っただけなのに、こんなに疲れなきゃいけないんだ。」

会長の爺さんとの電話を切った真流が喘ぐ。

あの内容は、書く必要性が1ミリたりともない。

ジイさんのふざけ癖が出て、真流がいじり倒された、と書けば十分だ。

「…まとめよう。今回の依頼、協会からの直接の周旋で、内容は魔法性の発光現象の調査。不審者の目撃情報もあるから、人為的なも

の場合には犯人の捕縛。場所は通称『雷帝の住まう町』、正式名称『雲影町』。依頼人はこの町長で、町と周囲には特殊性多重結果が貼られている、でいいか？」

半グロッキーの真流の代わりに、仁が話を進める。

「なんでそんなところにそんなめんどくさい術式が永久化されてるの？」

「ああ、なんでだろうな。つか、俺的には不審者とか魔法光よりも街そのものが怪しい気がするぜ。」

「…行きたくなくなってきたわ…」

「君の場合、口だけだから…」

「とりあえず、今日中に荷物をまとめてくれ。明日、ここを発つ。」  
真流がここまでの流れを止め、とりあえず解散になった。

彼らは、その翌日の朝依頼された場所へと向かうことになる。

その先に何かがあるのか、何が待ち受けているかも知らずに。

この前日の晩。島の最西端の町、雲影町。

そこから少し、北に向かったところにある、『鮮血の森』。

食人植物、『血みどろ野苺』が群生する危険な森。

そんな、高位の騎士すら敬遠する危険地帯に人影があつた。

数は三つ。全員ローブを着ており、顔はわからないが、一人は大剣を背負い、もう一人は、刀を差している。

「…難しいな。」

「やっぱり、条件が足りてないんじゃない？全部同時にするとか、順番が違うとか。」

「いや…そりゃねーと思うぜ。出力不足なんじゃねーの？」

「どちらの意見も正しいと、俺は思う。出力が足りていても、条件が違えば余計に力が必要になるし、条件が足りていても、一定の出力は必要だからな。」

「…これ以上上げる、と？」

「それだけの価値があるのだよ。『雷帝』には。」

彼らが歩いた後には、何メートルかに一体、『フラッシュ・スー血みどろ野葛』が、真つ二つに切り裂かれて、あるいは、鈍器で殴られたように砕けて、転がっていた。

彼らは進んでいく。

死の森を、無人の野を進むが如く。

夜は更けていく。深く、静かに。

その静けさの裏で、何が起ころうとしているかなど、気にも留めずに。

場面は変わって、真流たちが出発した次の日の夜。

真流は、雲影町の中にある森の中に来ていた。

この日、ここに着いた真流たちは、とりあえず宿をとって次の日に備えていた。

で、真流はなんとなく眠れなかったから、散歩に出てきた、というわけだ。

…散歩、とか言いつつも真流は忍者みたいに木から木へ飛び移っていたわけだが。

たんつ、と木から飛びはね、別の木に飛び移る。

真流の視界が段々と明るくなってきた。

そして、その視界が完全に開けたとき、真流は茫然となってしまうた。

美しい少女が、目の前の広場に立っていたから。

風に金色の髪をなびかせて、月を見上げている。

そこそこ距離はあったが、きれいだということは何となくわかった。

それに、スタイルもいい。

…すげー。

そう思った瞬間。

ズルツ！

ドサアアツ！！

木に足をかけ損ねて、真流は木の上から落下した。

「ぎゃあああああああああつっ！！！！」

がさがさがさあつ！！

真夜中の森の中に、騒がしい音と絶叫が響き渡った…

To be contend . . . Go to the next story .

## 第一話 始まり、出会いへのプロローグ（後書き）

今回の話は初期メンバーの顔合わせって感じですよ。

ちなみに次回の投稿は未定ですね。

ちよつとかかるかも。

感想とかください。

特に、変更前に読んでくださってた方々は、比較評価をお願いしたいです…。

ずつずつしいかもしれませんが一層よろしくお願いします。

自分のモチベーションにかかわることですから。

では〜



## 第二話 焔と闇の邂逅

私がこうやって、一人で夜空を眺めるのはもう何回目になるだろう。

同じ空を、あの三人で眺めたのは、もうどれくらい前になるんだろう。

同じ空なのに、味気なくて。

同じ空なのに、わけもなくさみしくて。

ねえ、どうして私は一人なの？

どうして、独りぼっちでいなくちゃいけないの？

何度も期待を持ったけど、そのたびにその期待は打ち砕かれて。

ほしいものが手に入らないのに、力だけあるなんて。

私は、強くななくてもいい、魔法だって使えなくてもいいの。

ずっとそれを求めて、裏切られ続けて。

傷ついて、傷ついて、傷ついて、傷ついて。

それでも。

ただ：ただ、友達が、ほしい。

友達が。

そばに、居てくれる人が。

さびしいよ……

本当に、さびしいよ……

もう、一人は嫌だよ……

「いつ……てえ……」

真流は、背の高い草むらの中で尻もちをついていた。

「ケガとかは…ねえな。…ってあれ？」

きよろきよろとまわりを見回した真流は、自分の周りの違和感に  
気付く。

自分のいるところだけ、妙に暗いのだ。

まるで何かの影になっているかのように…

と、何となく顔をあげて、真流は絶句してしまった。

紫色をした瞳が、自分のことを覗き込んでいたから。

それは、さつきまで広場の真ん中にいた金髪の美少女だった。

いや、さつきは顔はわからなかったが、間近で見ると本当に美少女  
であることが分かる。

そんな美少女と至近距離で目が合ってしまった真流は、

「あ、あはははは……よ、よう。」

とりあえず、右手を軽く上げて挨拶を試みた。

というか、テンパツてて、それしかできなかった。

それを見た少女は、カアアア…と赤くなると同時に、ぱっ、つと後ろとびに真流との距離をとった。

それを見て、この子、なかなか強いな、などどどうでもいい感想を抱いた真流だったが、彼女の口から出てくる言葉に面食らうこととなる。

「あ、あなた、何者？」

「…何者って、何？」

…返しとしては、最も間抜けな部類に入るに違いない。

しかし、言われたほうとしては本気でそう問い返したくなるような一言だった。

別に、怪しいこと（木の上から滑り落ちるという間抜けはやったが）をしたわけでも、力を使ったわけでもないのに、いきなりそんな事を聞かれればそう返したくもなるといふものだ。

とりあえず、彼女の全身から発せられている警戒心が、真流のいろいろなこと（主に心）に対して地味にダメージを与えていた。

「よし、OK、OK。とりあえず、お互いに自己紹介しよう。話はそつからだ。だからその攻撃的な雰囲気を含めてくれ？」

むっとした表情だった少女の顔色に変化は全くなかった。

いや、むしろ彼女の中の警戒レベルが引き上げられたような気さえする。

「…はあ、俺は竜爪真流りゅうすまめまこと。ま、覚えておいてくれよ。」  
半ばあきらめたようにそういう真流。

まあ、相手からの返事はあまり期待はしていなかった。

「名前を聞いているわけじゃないのよ……」  
むっとしたように呟く少女。

「私は、あなたは何者って聞いているの。」

「俺はただのか弱くて善良な一般市み……」

「ただの一般市民がそんな大剣を背負ってぴよんぴよん飛びまわれるわけないでしょう!？」

「そんな一般市民もいるさ。」

ふっ…と格好を付けて言う真流。

「…それは、一般市民とは言わないわよ?」

「細かいことは気にすんな。」

これ以上しつこくするな、とても言うように手をひらひらさせる真流。

「そんなこと言われても…っ!？」

「…!？」

カツ!と突然森の奥から、光が差し込む。

「…ちっ、件の魔法光か。しゃーねえ。俺一人で何とかするか。」

本来の目的との接触到、そうこぼす真流だったが、すぐに表情をこわばらせる。

少女は、胸に左手を当て、目をつむって何かをつぶやいていた。

右手はしつかりと大剣を握りしめながら。

「来たれ、闇精。弓弩と形為して我が敵を討て!!!」カム・ヒア・ラルヴァ・シェイブ・サム・アーチャーズ・バステイング・マイ・エネミーズ『影の射手』!

その言葉が止まった後、少女の周りには闇が集まりだす。

その闇は、いくつもの小さな球体となり、光のあった場所へ、人と何かの気配がある方向へと黒き矢を放った。

「…気配が増えたただと?ふざけんな。召喚師サモナーでもいるってのかよ。」

闇属性攻撃魔法の基礎の基礎である『影の射手』シェイド・ボウの黒い軌跡を眺めつつ、真流はそうつぶやいた。

そう、森の中で発光が起こった時、間違いなくそこには一人のヒ

ト　それも恐らくは人間だろう　　しかいなかった。  
しかし、少女が呪文の詠唱を始める直前、気配は二つに増えたの  
だ。

しかも、その気配は、間違はなく人ではない何かの気配だった。

魔獣か？ここで出すなら『魔狼』<sup>ガラム</sup>くらいだろうが…

そんな事を思いながら油断なく森の中を見つめる真流。

だが、すぐに彼はその予想が甘かったと知ることとなる。

「っ…！！そんなっ…！！」

「チツ…ふざけやがって…！！」

暗闇に光る、二対の赤い目。

平均的な大人の男性を超える高さ。

月光を反射する爪は凶悪なまでの切れ味がその煌めき具合からわか  
かる。

剣を構える二人の前に現れたのは、灰色の巨軀。

『魔狼』<sup>ガラム</sup>の上位種である『魔爪狼』<sup>ダンガルド</sup>だった。

…ちなみに、目が二対あっても、一匹である。

魔狼<sup>ガラム</sup>、とは見た目は大型の狼そっくりのモンスターで、強靱な筋  
力とそれに由来する防御力、鉄を切り裂く爪が特徴で、その爪は魔  
力により切れ味が増すという。

人が一人、二人で対峙するにはとても危険なモンスターでもある。  
その上位種である魔爪狼<sup>ダンガルド</sup>は、本来は正規軍一個分隊で対峙するレ  
ベルのモンスターなのだ。

そんな化け物を前にして、二人は構えを解かない　　つまり、  
戦う気だ、ということだ。

「おい、お前。さっさと逃げる。」

「…できるわけないでしょう。」

「…つっても、お前の打った『影の射手』<sup>シェイド・ボウ</sup>は全然効いてねえぞ。」

そう、さっき少女の放った魔法は確かにこいつに当たった。

しかし、この魔爪狼ダンガルドは何事もなかったかのように表れたのだ。

「ただの一般人じゃなかったの？」

「…疑ってた癖によ。」

そんなことを言い合いながら、それぞれの武器を構える二人。

魔爪狼ダンガルドの咆哮とともに、戦いの火蓋が切って落とされたのだった。

「うおおおおおおおつ！！！」

裂帛の気合とともに、魔爪狼ダンガルドに肉薄する真流。

振るう大剣『天裂』には、紅蓮の炎がともっている。

走ってくる真流に向かつて、鋼鉄をも切り裂く爪が襲いかかる。

長さに、直撃をもらえば間違いないく体を貫通するだろう。

対する真流は普段着、つまり防具を身につけていない。

もつとも、あの爪の前では生半可な防具では紙屑同然だろうが。

「ふっ！！」

短く息を吐き出し、身をひねる真流。

身をひねった真流はそのまま加速、魔爪狼ダンガルドに斬りかかる。

紅蓮に燃える刃が魔爪狼ダンガルドに襲い掛かる。

が、相手は身をわずかにそらした。

無論、かわしきれたわけではないのだが、頭を狙った真流の攻撃

はそれで、魔爪狼ダンガルドの左肩に大きく、浅い傷を残すにとどまった。

「チッ…！！浅かったかっ…！！」

舌打ちをした後、上から襲いかかってくる前足をよける。

その凶悪な爪が地面にたたきつけられるたび、大地が大きく振動

し、直撃した周囲が陥没する。

右足、左足、右足……確実に自分を狙うそれをよけ続ける真流。

攻撃に隙がない。反撃に移れるだけの隙間があればいい

んだが…

「しゃーねえ。上に放てば大丈夫だろ…たぶん。」

そう呟いた真流は、自分の使える数少ない魔法の一つを発動させるべく、呪文を唱え始めた。

一方、少女は目の前の光景にあっけにとられていた。

そもそも、ダンガルドとの戦闘はアウトレンジからの高火力砲火を浴びせるのが定石だ。

しかし、目の前の少年の行動はセオリー無視もいい所、殺してくださいと言っているようなものだ。

ダンガルド 魔爪狼と相対した時、最も恐ろしいのは実は鋭い爪ではなく、その筋力が生み出す爆発的な攻撃速度と破壊力だ。

そのため、ふつうは接近戦を挑むと前足の一撃を見切れずに引き裂かれるか、攻撃の余波に吹き飛ばされるのだが……

あの少年は敵の初撃を見切り、大上段からの一撃を喰らわせた。それだけでもすごいことなのだが、そのあとの連撃も一発たりとも当たっていない。

「はっ……！！私も、戦わないと！！」

思わず見とれてしまった自分が喝を入れ、少女はダンガルド魔爪狼を大きく迂回するように走り出した。

「其は紅色の霊槍。焼け集え、死と破壊の象徴にして再生と輪廻の門番よ。我が意志により、あらゆる盾を貫き通し、すべての鎧を燃え散らせ！！」

真流の頭上に焰が集まってゆく。

狙いを定めるため、一瞬の隙間を縫って上を見上げると、視界の端に金が映った。

「鬼狩流十二焰法の八つ！『突』！！」

再び落ちてきた前足をかわし、真流が叫ぶと、真流の頭上に二本の炎の槍が現れた。

真流が手を前に振ると、その槍はダンガルド魔爪狼に向かって飛んでゆき、その両肩に突き刺さった。

身を焼く痛みに苦悶の声を上げるダンガルド魔爪狼。

その瞬間、ダンガルド魔爪狼の右奥の木の上から、大剣を振りかざした少女

が落ちてきた。

「やあああああああつ！！！」

黒い影をまとった大剣で、ダンガルド魔爪狼の首を突き刺す。

「らあああつ！！！」

真流は、さらにと、炎のまとった大剣でダンガルド魔爪狼の喉笛を断ち切った。

首を切り裂かれたダンガルド魔爪狼は、大量の血を流し、断末魔を上げることもできずに倒れた。

戦闘のあと、二人が休んでいると唐突に真流が口を開いた。

「…そういえば、お前の質問に答えてなかったな。」

「え？」

「俺が何者かってやつだよ。…おれは世界魔術協会所属の魔導師で、魔導屋『竜爪蘭』のオーナーだ。」

「…それ、私に言ってもいいの？」

意外そうな顔をしている少女を見て、半笑いになりながら真流はこう言った。

「いまさらだな…あんだだけ派手にやったら、素姓の半分を告白するようなもんだ。気にしねーよ。」

そう言いながら、真流は少女をそれとなく観察し続ける。

この少女は、さっきからどうも居心地が悪そうにしている。

この子も、きっと何かあったんだろうな…あの眼が昔の俺みたいだ。

なんて、そんなことを真流は考えていた。

一方少女の心の中では、二つの感情が混ざって、どうしていいのかわからない状態になっていた。

真流に惹かれている。それは、間違いない。

だけど、怖い。人を好きになることが。

この人も、私のことを知ったらきっと……



と、そんなことばかり彼女の頭の中には回っていた。そんな状態で。

「…雫。」

思わず、といった感じで口をついて出た言葉。

「え？」

急にかけられた言葉に、聞き返す真流。

「赤維あかいしずく、雫。」

その言葉の意味を理解した真流は、急に笑顔になった。

「ははっ、そっか、そっか。雫…赤維雫か！」

「…何でそんなにうれしそうなのよ。」

ちよつと頬を赤く染めながら、不機嫌そうにそう呟く雫。

「嬉しくもなるって！さっきまで名前すら教えてくれなかったのに、もう一歩前進したんだからな！！」

「そ、そう…」

真流の勢いに少し押され気味な感じで相打ちを打つ雫。

「…っとお。わりい、俺はそろそろ帰るわ。」

そう言いながら立ち上がる真流。

そのまま数歩歩いた後、急に立ち止まって思い出したように、

「明日も、眠れないかもしれないな。」

と、上を見て言ったあと、真流は森の闇に消えていった。

…何をしてるのかしら。私は。

あんな初対面の男性に名前なんて…

今までの私では考えられなかった。

いいえ、そもそも『ヒト』と親しく話す、なんて…

…似た流れで、何回傷ついてきたと思ってるのよ。

何回、希望をつぶされてきたと思ってるのよ。

なのに、どうして、また会いたいって思うのよ。  
どうして、こんなに胸がドキドキするのよ。

バカ、バカ、バカ、バカ。  
私の、バカ。

このドキドキいったい何？

この胸の苦しさは、何？

……信じて、みようかな。

最後の、一回だけ。

……やっぱり、私ってバカ。

「ああ！？<sup>ダンガル下</sup>魔爪狼とやり合ったあ！？」

とある宿屋のとある一室。

時間は次の日の朝。

仁の叫びが静かな朝の空気を切り裂き響く。

近所迷惑だバカ野郎。

真流は、昨晚の出来事がある程度脚色して、というか、雫のことは伏せて二人に話していた。

「嘘じゃねーぞ。かなり不自然な現れ方だったけどな。」

「不自然……？いやまあ、疑ってるわけじゃないんだ。ほくも、オオカミの咆哮は聞いたから。」

「あたし、聞いてないわよ？」

「どうせお前は寝てたんだろ……」

そう真流がこぼすと、

「正解。」

仁は苦笑いしながらそう言った。

「で、不自然ってどんな感じだったんだ？」

「ああ、なんか、こう“遭遇”したっていうより“出現”って感じだったな。」

「接近する気配がなく突然、至近に現れた？」

「そう。そんな感じ。」

「うーん…と考え込むようなしぐさをした後、仁は言った。

「十中八九、人の手によるものだね。サモンモンスター 召喚獣か、タイムモンスター 仲魔かのどちらかだろう。仲間になった魔獣にはステルスだってかけられるしね。」

「このことも、依頼人には知らせとくか。」

「だね。」

……二人が、ベッドを振り返るといつの間にか楓が二度寝していた。

「静かだと思っただらこのアフォは…」

「あ、あははは…」

仁は笑うしかないようだった。

その後、真流が楓の頭を思いつきり殴って楓を起こした。

「レディに何するのよー!!」

と怒られていたが、

「男の前であられもない寝姿をさらす奴のどこがレディだ!」

といわれると、ボン!!と赤面して静かになった。

恥ずかしいならきちんとしろよ、と言いたくなつた真流だが、よく考えると自分のほうが恥ずかしいことに気付き、口を閉じる。

そんな感じでうだうだしつつ、彼らは、そのまま依頼人のところへ向かった。

彼らはそこで、さらに面倒なことを聞かされることになる。

同じころ、鮮血の森には昨日と同じフードをかぶった三人がいた。そのうちの一人は、強い魔力を放つ黒い勾玉を持っている。

「…ようやく宝具が1つか。」

「そういうな。宝具はどれも結界の維持が一番しやすい場所に安置されているんだ。むしろ今回は簡単だったと思え。」

「ヘイヘイ。まあ、結界なんてのはすぐに劣化するからな。約千年よく持つてるぜ。」

そんな話を話していると、木の上から黒い影が降ってくる、が三人は特に気にせず話を続ける。

「そうね。むしろ千年たつても消えないなんて…いつたいどんな技術を使ったのよ…『砂の射手』<sup>サンド・ボウ</sup>」

「そうだな。先人も厄介なものを作ってくれる。ところで『術式基<sup>キ</sup>点』<sup>ポイント</sup>への干渉は大丈夫なのか？ 『雷電の霊槍』<sup>ライティング・スピア</sup>」

「チツ…そんなちまちましたことを結界にしなくてもよお…『火炎<sup>ファイニン</sup>の衝撃』<sup>グ・インパクト</sup>」

話している三人に襲いかかろうとした魔物は、おしゃべりの中に混ぜられた魔法ですたばろになって絶命した。

うだうだと話しながら、三人は森へと消えていった。

何かが、起ころうとしていた。

いや、もうすでに起こっている。

ただそれは闇夜によって隠されているだけだ。

いずれ、表に現れるだろう。

……空が、白じんできた。

よるが、明けそうだ。

To be contended . . . Go to the next story .

## 第二話 焔と闇の邂逅（後書き）

ああ、なんだかんだでできました。

早く次のを…と言いたいですが、自分はそろそろ受験生になろうかというところなので！更新ペースがさらにカメになると思われま  
す…

見捨てないでね！

### 第三話 知世の響波（前書き）

ども。

みなさん、お久しぶりです。

英語って難しいっすね。

え……？そんなことない……？

……

そっ、それでは、第三話、どじどっ……！！

### 第三話 知世の響波

その日の昼、真流は宿の部屋で棒付きキャンディーを啜えながら空を眺めていた。

ちなみに、今の真流の恰好は、赤っぽいロンTと黒のジャージという完全なくつろぎスタイルだ。

…一応、依頼人との話と、ついでの情報収集も済ませてきてる。

「むー……ん」

ゴロゴロという音とともに、青白い光が空を走り、真流の真剣そのな顔を照らす。

それでも変わらず空を見眺める、いや、見つめる。何か考え込んでいるようでもあるが…

「んー。偶然にしてはタイミングが…いやでもなあ…」  
「がりっ！という音が部屋の中に響く。」

真流は、そのままバリバリとキャンディーを噛み砕き、ポシエツトから新しい分を取り出す。

「何してるんだ？」

灰色のパーカーと紺色のジーパンを着た仁が真流の後ろから声をかけた。

「…いや、な。どうも空がねえ。」

「空？」

そう、空。と言っても、真流はただ空をぼんやりと眺めているわけではない。

と、今度はぶつかぶかのTシャツを右肩が丸見えになるほど斜めに着た楓が真流に絡んできた。

ちなみに下は…まああれだ。裾が長いからな……気にするな。

「何々？空がどうかしたの？」

「いや、雲、昨日と比べてやばいほど増えてないか？」

「…そうだけど？」

頭にハテナを飛ばしている楓は放っておいて。

「昨日の件とか依頼の件とかと何か関係があるかもしれない、と？」と、仁が確認する。

「まあ、な。それと…これは俺の聞いた話だが、『鮮血の森』に大量の光球が現れて、光の柱を作った、という噂、というか証言があった。つてことは、だ……」

「『結界破りの散光』、か。で、破壊された結界がこの町の魔素の状態に何らかの影響を与えているかもしれない、と…」  
ふむ、と仁は顎に手を当てて考え込む。

「ま、考えてても仕方ない問題だろ。これは。まあ、とりあえずは昨日召喚された奴から魔力探索とかをやってみた方がいいかもしれないけどな。つか、むしろ今はあれが一番怪しい。」

真流は啜えた飴の棒をピコピコと揺らしながらそう言う。

「じゃあ、今から行くのねっ!!」  
と言いながら飛びだそうとする楓の襟首を掴み上げ、暴走を止める真流。

「待て、その前にいろいろ準備が必要だろ。つか、お前まさかその恰好のまま出る気か？」

「ふえ…？あ……」

見下ろし、自分の格好を確認する楓。

ちなみに今の格好はただでさえちよつとあれなのに、真流に引つ張られているせいで真流の位置からは首のところが広がって背中が、ちよつと離れた所にいる仁には裾が上がって下着（下）が丸見えの状態だった。

二人の視線がそっちに行ってしまったのは…仕方のないことだろう。男だから。

ちなみに本人はというと、あまりのことにフリーズしていた。

が、2〜3秒後に再起動、ギギギ…と音がしそうなほどのぎこちなさで真流のほうを向いて、



「み…見た…？」

と、顔を真っ赤に染めて言った。

「えっと…水色？」

鼻血を垂らしている真流はほぼ反射的に目に映った色を答えた。

ちなみに、背中の留め具の付いている部分の色である。何のとは言わないが。

そしてそれを聞いた楓はさらに赤く染まって、真流の手から服を引っ張り出し、

「ばかあああああああつ！！！！！」

「ばなまつ！？」

なぜか仁を思いつきりぶん殴った。

さて、場所は変わって昨日、戦闘があつた場所。

「これ、売ったら高いかな？」

楓がそう言いながら手にしているのは魔爪狼ダンガルドの牙である。

そう、よりによって牙である。

大事なことから二回言いました。

その後、三人は服装を整え、持ち物を確認した後ここまで来たのだが。

例の死体を見つけた楓は目をキラキラさせてそれに接近、おもむるに口の中から1本の牙を引き抜き上のセリフを吐いたのだ。

「…こいつを倒せるやつは少ないから体のどこを売ってもほとんどが高値がつくよ。」

仁は、やれやれ、とでも言いたげな溜息とともにそう返す。

「というか、何でよりによって真っ先に牙を引き抜くかなこいつは…」

「真流、確実に気分だよ。あれ。」

「そんなことは百も承知だ。……」  
「たださ、そんな疑問を口にしたくなる時だつてあるんだよ……」

早くも本来の目的を忘れ去っている楓にげんなりしつつも、探索を始める二人。

ちなみに楓は完全に放置である。

「龍眼。」

「マジック・リザーブ」

「知世の響波」

「真流の目が黄緑から濃紺に変色する。」

それと同時に、仁の周りに目に見えない波が広がっていく。

ちなみに、真流の使ったのは真流の本来持っている能力の一つで、魔力やマナの流れを読むことができるようになるスキルだ。余談だが、これは発動すると瞳孔がドラゴンの目のように細長くなる。ついでに視力も上がるらしい。

「……なあ、これホントに大昔に張られた結界か？」

「……それは僕も思ったけど、こんな特殊な結界は今の術式理論じゃ無理だよ。」

「つくづくこの島は非常識だなあ……」

「そうだねえ……」

周りをざつと調べた二人の感想である。

通常、今の技術で張られた結界はたいてい1年単位ではりかえなければ強度が保てないもののだが、この結界は張られて約千年たっているというのにほとんど無傷で、1日前に張られたといわれても信じられるほどのものだったのだ。一部を除いては。

「で、だ。俺が見たところ昨日光ったあたりを中心に結界の破損がひどいんだけどどう思うよ。」

「……うん、そこだけ不自然にね。ほかの部分もヒビとか入ってるけどそこが一番ひどいよ。」

「だよなあ……」

二人で首をひねる。今の状態ではこれが何を意味するのかは皆目

見当もつかないが、とりあえず次にするべき行動は、

「結界について調べるかな…」

「そうだな。それから…網でもはつとくか？」

「アミ？」

ダンガルド  
魔爪狼の爪やら牙やら毛皮やらをかばんに詰め込み終わった楓が話に加わってくる。

「ああ、網だ。この結界、魔力の流れで呪紋を描いてるんだが、この近くにあったっぽい呪紋の集合地点が破壊されてる。たぶん、こら辺の結界の破損が不自然に大きいのはそのせいじゃねえかと俺は睨んでる。」

「その根拠は？」

楓が先を促す。

「…仁、地図、あるか？」

「ああ。」

短く答え、リュックから地図を取り出す仁。

「このこと、ここ、それから、このことここに呪紋の核みたいなのがあるんだが…」

ポンポンポン、と地図を指さしながら話す真流。

「……！！そうか！あの探査をかけたときに感じた違和感の正体は…！！」

それを見た仁ははっ、としたように口を開いた。

対して楓は。

「…で？」

まったくわかってなかった。

「…楓は魔方陣について勉強しなさい。ほら、今言った地点にここを合わせて線で結ぶと…」

と言いながらペンで地図に点を打ち、線で繋いでいく真流。

そして地図の上に描かれたのは…

「…何でそこでわざわざ五芒星を書くの？」

「いや、ノリ？」

見事な五芒星だった。真ん中に正五角形ができるくらいきれいな五芒星だった。

「星にした意味は？」

「無いっ！！」

「言い切ったねえ……」

いつものことなのでそこまでしつこくは言わないのだが、それでも呟いてしまう仁だった。

しかし、ここまですると楓にも真流の言いたいことがわかったよ  
うで。

「つまり、ここに書かれた残りの四か所のどこかにあいつらが現れるかもってことでしょ？」

「まあ、そういうことだ。」

そういえば……と、仁は思い出したように口を開く。

「この森の奥の方向に強力な魔力をひとつ感じたんだけど……」

「……怪しいわね。」

二人がそう言って顔をしかめている中、真流は、

「……仁、その魔力はたぶん大丈夫だぜ。」

と、にやにやしながら言った。

「……根拠は？」

「あるけど、いえねえなあ。」

「にやにや。」

「真流っ！！何なのよっ！！そのにやにやはあっ！！」

楓の言葉を聞いた瞬間、真流はその場にしゃがみ込む。  
その直後、喰らったらシャレにならないスピードのハイキックが  
真流の頭のあつた場所を通過していった。

「あつぶねえええええ！！お前、今のは喰らったら頭が西瓜みたいに  
弾けてたぞ！！」

「うっさいわねー！ム力つくのよ！そのにやにやがー！」

高速で迫ってくるつま先をよけ、こぶしを掌底でそらし、落ちてくるかかとをいなす。

双方が身体強化術式を使用しての鬼ごっこである。

そのため、無駄に早く、無駄に威力がある。

どれくらい威力があるかというところ、振り下ろされた楓のブーツのかかとが地面を陥没させるくらいに強力だ。

そんな攻防が目にもとまらぬ速さで行われているわけである。

「バカだな。」

その人間離れしたじゃれあいを見ながらつぶやく仁。

しかし、あの違和感の理由はそれだけなのか…？

探査をかけたときに感じた妙な違和感に胸騒ぎを覚えながら、仁はついに鳩尾にパンチを入れられた真流を眺めていた。

同じころ、真流たちが見つけた、結界維持の呪紋の集合場所の一つに三つの人影があった。

三人とも、フード付きのローブを着ている。

そのうちの一人の足元には巨大な魔法陣が展開され、何かを必死にやろうとしている。

そして、その周囲には、三人を囲むようにして呪紋の刻まれたナイフが刺さっている。

そのナイフの持つ効果は、簡易式の認識阻害結界の構築だ。

もっとも、簡易式なだけあって、効果はいま一つだ。

と言うか、「呪文処理を施した媒体で範囲を指定し、発動させる」という手軽さや簡単さを重視しているため、この類の結界としては、阻害の効果がずさんだ。

それでも、真流の『眼』をごまかし、仁のソナーにも『違和感』レベルの補足しかされてないことを見ると結構完成度は高い。

…もつとも、それは彼らの探知が広範囲だったため、精度がそこそこだったのが大きな理由ではあるが。

「…今のは。」

腰に刀を差した少年が、何かに気づいたように周りを見回す。

「…ああ。たぶん、『マジックリゾナー知世の響波』だ。」

背中に大剣を背負った少年は、魔法陣を展開している少女から目を離さずに、彼の言葉を肯定する。

その言葉を聞いた瞬間、ビシッ…！！と周りの音が聞こえそうな勢いで空間に歪みが生じる。

少女の足元に展開する魔法陣の光が、不安定に揺らめきだした。

「っ…！！おいっ！おまつ…魔力を乱すなっ！！」

「くっ…！ごめんっ…！！！」

少年に一喝され、少女は必死の表情を浮かべ、意識を集中させる。

そのため、魔法陣の光は安定する。

「この魔力線は切断…こっちは結び目をほどいて…そっちとあつちは接続して…」。時限式の術式に書き換える…っ…！！」

少女が言葉を紡ぎ終えた後、一瞬、爆発するように光量が上がリ、その後、光とともに少女の足元の魔法陣も消えた。

「ふー。」

一仕事終えたような表情で額の汗をぬぐう少女。

いや、実際一仕事終えたのだから。

「出来たのか？」

大剣を背負った少年が少女に問いかける。

「ええ。いくつも『綻び』作っておいたし、大丈夫よ。発動は今夜たぶん、深夜になると思うわ。」

「ふっ…そうか。」

と、そこで刀を差した少年が口を開く。

「…大丈夫かよ。」

「なにがだ？」

彼の言葉に、大剣を背負った少年は表情も変えずに問い返す。

「さっきのやつだよ。ありゃ、おまえが昨晚見つかったって奴じゃねえのか？」

視線を少女の方に向けながら、彼は不機嫌そうに言う。

「…たぶん、そうじゃないかと思う…」

「あれか？ 転移召喚のスクロールを使ったという…」

少女の肯定に、大剣の少年が確認する。

「ええ。 昨晚の…」

「ダンガルド魔爪狼を倒すか。…ククツ。」

それを聞いた途端、心底おかしそうに、彼は小さく笑った。

「?どうしたの？」

「いや、別に。…いいねえ。この任務、つまんねーかと思ったら…なかなか面白くなってきたじゃねえか。」

少女の問いかけをごまかした後、少年は小さく呟いた。  
瞳に狂気を宿し、凶悪な笑みを顔に張り付けながら。

ちなみに、その表情を見たほかの二人は、「ああ、またあの病バトルジャンク気か。」と思ったとか、思わなかったとか。

「って、いつまでもここにいたらヤバいかもしれねえ。」

刀を差した少年が、はっとしたように二人に言う。

「あ…そういえば、この結界って簡易式だから穴があるかもしれないんだっけ？」

「…そうだったな。いい加減退散するか。」

そう言いあい、三人はナイフを回収し、森の中に消えていった。

空には、この先にあることを暗示するかのように、重い暗雲が立ち込めていた…

x T  
t o  
s b  
t e  
o r  
y c  
. o  
n  
t  
e  
n  
d  
. .  
. .  
G  
o  
t  
o  
t  
h  
e  
n  
e



### 第三話 知世の響波（後書き）

これも、勉強の合間をぬって書いてるんですが、いやはや…。

うん、次はいつになるのでしょうか？知るわけじゃないですね。

まあ、今から忙しくなっていくうえ、2作品並行でやってるので、次の投稿は未定となっております。

まあ、いいよね！（よくないと思う…）

感想くださいっ！

ではー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4975q/>

---

BLAZE IMAGE ~ 龍焰の魔法使い ~

2011年5月29日20時25分発行